

宗教通信 - 1

みなさん、お久しぶりです。元気ですか。と言ってもしょっちゅう姿は拝見しており、また世界史Bの人とは腐れ縁を続けているのですが。

3学期から宗教の授業をすることになっています。君たちの中にはこれを考えると体のあちこちが痛んだり、便秘になったりしている人がいるかも知れませんが、それは私のせいですのであしからず。

さて、この授業で哲学(思想)の歴史を扱っていきます。ただ、3学期はうれしいことにすぐ終わってしまい、わずか7か8回しか授業がありません。哲学の歴史は、週に一回の授業なら、一年かけても足りないくらい内容の豊富なものです。でも本当を言うと、もしそんなに詳しくやるなら、こちらももっと勉強せねばならず、それも困りものです。ともかく、この時数不足を補う意味でも、こうやってプリントを出したいと思いました。

実は文章を書くことで私の頭も整理できるので、まず自分のためにという利己主義的な目的もあります。ただ、哲学について何か簡単に説明できたらとは、長年心に暖めてきた考えです。と偉そうに言いますが、私は大学で哲学を専攻したわけではなく、専門家ではありません。ただ、司祭になる前に哲学全体にわたって勉強をさせられたので、哲学が何かを漠然と知ってもらう程度ならできると思います。ただ、興味深い授業ができるかは不安ですが。ともかく、できたら、読まずにゴミ箱に捨てることはせずに、ざっとでも目を通して欲しいのですが、百歩譲ってたとえ読まなくてもファイルにしまっておいってください。いつの日か役に立つ日がくるかもしれないと思っていますので。もっとも、このプリントもどれくらい書けるかわからないのですが。

さて、哲学という言葉聞いて、「ああ、あのことか」と合点がいく人はおそらく一人もいないのではないかと推察します。かく言う私も、神父になる前に勉強するまでは、「哲学」とはいったい何のことか心得はありませんでした(簡単に言うと「知らなかった」ということ)。日本には哲学の伝統がないので、これは仕方がないことだと思えます。そこで、授業を始める前に、簡単に説明しておくのも意味のないことではない(簡潔に言えば、「意味がある」ということ)と思い、苦勞して頭をひねりながら文章をひねくりだそうとしているわけです。

哲学という作業は、古代ギリシアで生まれたとされます。しかし、それを始めた人たちは、「われらは哲学をしとる」とは考えていませんでした。ただ、「万物の根源は何か」という問をひたすら追求していたようです。それを見て「何の役にも立たへんことを、飽きもせずやってはるわ。暇なお人や」というふうに馬鹿にした人もあるわけですが、そんな雑魚のさげすみは屁とも思わず、このような態度でいろいろと考えを掘り下げていった人たちがギリシアにはいたのです。後に、このような人を見て、「彼らはお金のためでも、名誉のためでも、快樂のためでもなく、ただ真理を知りたいという態度で学問をしている。あの人たちのしていることは智恵(sophia)を愛する(philo)ことだ」と言って、philo-sophiaという言葉が生まれたそうです。これが明治時代に「哲学」と訳されたわけです。(ついでながら、上智大学とは英語では Sophia University と言います。上智というのは、カトリックでは最も気高い智恵のことです。また日本語で博愛と訳されている言葉は、philanthropy (philo と anthropo がひつついた)ですが、これも anthropo (人間)を愛するといいい意味です)。

かくて古代ギリシアで一連の知識人が「ああでもない、こうでもない」と考え続けていった結果、豊かな思想が蓄積されて、紀元前4世紀にプラトンとアリストテレスという人によって、学問と呼べるような段階になりました。これをギリシア哲学と言います。これは貴重な人類の遺産の一つで、後の西洋の思想の歴史は、結局この二人の残した遺産とキリスト教の教えの上に展開していくと言っても過言で

はないでしょう。そして、この思想の影響は、良きにつけ悪きにつけ今では全世界に広がっています。

では、哲学とは何を勉強するものでしょうか。さきほど、哲学は万物の根源を探し求めることから始まったと言いました。ここに答えがあります。すなわち、哲学は万物、すべてのものを対象とする学問です。「でもすべてのもの」ってなんででしょう。なんだと思いますか。すべてのものとは、「存在するものすべて」のことです。

ここが哲学の変わっている点で、みんなはきつとここに引っかかると思います。というのは、今までみんなが勉強してきた学問は、すべて個別学問といって、「存在するものすべて」ではなく、たとえば物理なら「物質を持つもの」、生物なら「生命をもつもの」というふうに、対象をあるものに限っているのです。別の言い方をすると、物理では「物質を持たないもの」、たとえば言葉、思想、生命などを研究の対象にしません。生物なら「生命を持たないもの」、たとえば石や金属を研究しません。それに対して、哲学はすべてを考察の対象にするのです。

また、哲学は、最も根本的なことを追究します。個別学問は、いくらかの前提から出発するのですが、哲学はその前提を問題にするのです。たとえば、物理学は「物質とは何か」を、生物学は「生命とは何か」という問題を考えることなく、それらが当然のものとして学問を進めていきます。もちろん、物理学者が「物質とは何か」、あるいは生物学者が「生命とはなにか」と考えることがあるでしょう。しかし、それらの問題は物理学や生物学では解けない問題なのです。なぜかと言うと、物理学は物質を対象とするために重量や大きさや熱などを測定する必要があるけれど、「物質は何か」という問題は測定器で計れないものだからです。

そういうわけで、哲学はすぐに何かに役に立つものではありません。だから大学で哲学を勉強しても就職がほとんどないのです。一例を挙げますと、政治には有効な政策を立てて、それを実行することが必要です。しかし、政治家たるもの「いったいどのような国を作るべきなのか」という明確な考えを持たねばならないでしょう。哲学の勉強は、この明確な考えを持つのには役に立ちます。でも、そのような考えがなくても小手先の政策で目の前の困難な状況を打破することは可能ですし、逆に明確な考えを持っていても、現状の把握ができなかったり、人間の心の機微を理解しなかったりすれば、せっかくのよい政策も実現できないことも多々あります。みんながこの授業から哲学のぼやっとした内容を知り、その結果、一定の人間観と世界観を持つはずなのですが、だからといって偏差値が上がるわけでも、スポーツがうまくなるわけでもありません。ただ、人生の方向付けにはいくらか役に立つ、あるいは人生の問題に突き当たったときに解決の糸口が探れる（もちろん、そのためにはキリスト教の教えを知っておくことも役に立つ）てなことになればいいな、と考えています。

そんなわけで、まったくどうなるかわかりませんが、一緒に考えながら授業ができればと思っています。積極的に参加してくれることを望みます。ではまた。

